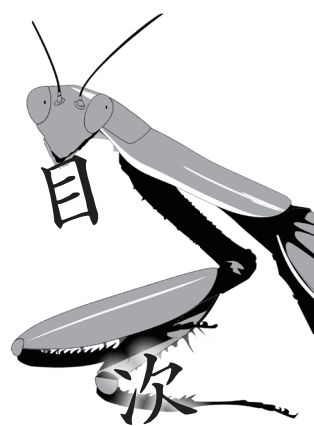


啾茶店文艺

2021年7月号

喫茶店文芸 2021年7月号――



天野満

不酔の細道

1

福原大輝

二人、夜行

5

氷川省吾

ハエ

11

マサユキ・マサオ

『朱と印』

13

天野満
不酔の細道



大通りを行く。

華やかな商店の明かりや、せわしく行きかう車のヘッドライトに照らされて、夜の通りはまるで昼間のように明るかった。

俺はどこに行くのだった。わからない。ただ、どこかに行かなくてはいけないことはわかっている。だからこうして歩いているのだ。口からはため息が漏れ出て、空きテナントの暗い窓に映った自分の顔はすっかりやつれている。

酔っ払いに肩がぶつかった。

大通りは酔っ払いに満ちているから、ボンヤリ歩いているところになってしまふ。犬は歩くと棒に当たり、人間は歩くと酔っ払いにぶつかる。

酔っ払いは大きな声で、俺に人生を説く。酔って気が大きくなった彼らは、誰かれ構わず見境がない。

「君、気をつけたまえ。私は忙しいんだ。時は金なり、社会も金なり。邪魔をするな。君もボンヤリしてないでしっかりしなさいよ」

酔っ払いの首にかかっているどこかの企業の社員証には、小紋縛蔵、と名前が書かれていた。

なぜ、見ず知らずの男に、いきなり人生を説かれなくてはならんのか。

俺は嫌になって、その場を逃げ出す。したらば、また別の酔っ払いに当たってしまった。

「ええか、男たるもの……」

「社会人として……」

「常識的に考えて……」

「世の中は甘くないぞ……」

逃げては当たり、当たっては逃げ、を繰り返した。

俺はどこに行くのだった。わからない。少なくとも、ここじゃないところへ行きたい。

懲りずに大通りを行く。突然、音楽が聞こえてきた。

三上地動説です、と名乗ったミュージシャン風の男はギターに合わせて歌を歌った。

社会に適合出来ないオレ、カッコイイ。

歌詞の内容を要約すれば、そのようなことばかり歌っているのである。

自分の怠惰怠惰をむやみやたらと有難がつて、こともあろうに歌にして、ええ気分になっているのである。

歌詞は音楽の全てでは無い。俺はそのことを認識しているが、それでも楽曲や演奏について言及しなかったのは、筆舌にしがたいほどそれらが拙劣だったからである。

三上の前に置かれたギターのハードケースには大量の投げ銭が入っていた。

「持ち曲、カバーしかないんですけど」

文章にしたら、カッコワライ、みたいな感じで三上が言う。

途中で「これはすごい思い出深い曲で」と言っていたので、全部自分の曲だと思っていたのだが全て他人の曲なのである。三上はカバーとのたまひ、他人のふんどしを締めて土俵に上がり、こともあろうに金まで儲けているのである。あんまりうるさいこととは言いたくないが、法律に触れるのではないか。

いつの間にやら紋切り型の流行ファッションに身を包んだ人々が集まっていた。それは街灯に群がる羽虫のようだった。彼らは無表情で、エモいー、などと口走りながら、スマホで写真や映像を撮り、SNSで拡散する。ハート型の空箱と幾ばくの銭が空中を飛び交って、ハードケースに入っていく。

聴衆からパワーを得たのか、三上はいよいよ興奮の絶頂に達して、叫ぶ。

「人生が上手くいかないのは、社会のせいだ！」

俺はどこに行くのだっけ。わからない。でもここは嫌だ。

俺はそそくさ、と場をあとにした。どこか上の空な歓声と、乱雑にかき鳴らされるギターの音がただだ不愉快だった。

——酔っ払いは大きく分けて、三種類に分けることが出来る。

頭の中で散り散りに舞っている思考を束ねて、俺は説を打ち立てた。

一つ目は「本来的な酔っ払い」である。彼らは酒に酔っている。酒を多量に摂取して酩酊すれば、誰もがこの分類に当てはまる。

二つ目は「社会的酔っ払い」である。彼らは、社会に適合して活躍することを良しとしており、「社会に適合出来る自分と、世間体のよろしい人生」に酔っている。大通りに生息している大半の酔っ払いはこのパターンが酒を飲んだもので、小紋縛蔵のような人間が例に挙げられる。

三つ目が「個人的酔っ払い」である。彼らは社会に適合出来ないことを一種のステータスとして考えている。「社会に適合出来ない」と開き直って自分の人生を正当化する「行為に酔っており、

やはり酒にも酔っぱらう。三上地動説のような人間がこれに該当する。

別に酔っ払いが悪いとは思わない。

むしろ、酔っ払えるものなら、俺も酔っ払いたかった。大通りを歩き、人生を説いて回りたかった。全てを他人のせいにして、乱痴気騒ぎしていたかった。

ただ、俺は酒を飲んでも、肉体が酔っ払うだけで、心が酔っ払わない。そして、人生にも酔えない。社会に適合して大通りを行っても、適合出来ないが開き直っても——。

俺はどこに行くのだっけ。俺はどこに行くのだっけ。俺はどこに行くのだっけ。

俺は、どこに行けばいいのだっけ。

頭を抱えてフラフラ歩くうち、いつの間にやら俺は大通りを外れて、見知らぬ細道に立っていた。すっかり歩き疲れて、細道の端に座り込む。この細道には酔っ払いがいない、というか、人自体がいない。店も何もなく真っ暗だった。

俺はどこに行くのだっけ。

最初から目的地なんて無かったんだよ。

薄々感づいてはいた。俺は「酔わないこと」に酔っていた。だから、人のことを酔っ払い呼ばわりしていたのだ。安心したかった。そうでもしなきゃ、寂しくて、不安で、やっつけられなくて。そんなことしても、もっと寂しくて不安になるだけだってわかっていたのに。

俺はどこに行くのだっけ。

何度も繰り返した自問自答だが間違っていた。正しくはこうだ。
俺はどこに〈行きたい〉のだっけ。

不思議なことに、華やかなはずの大通りにいるより、この暗く
静かな細道にいるほうが、俺の心は安らいだ。

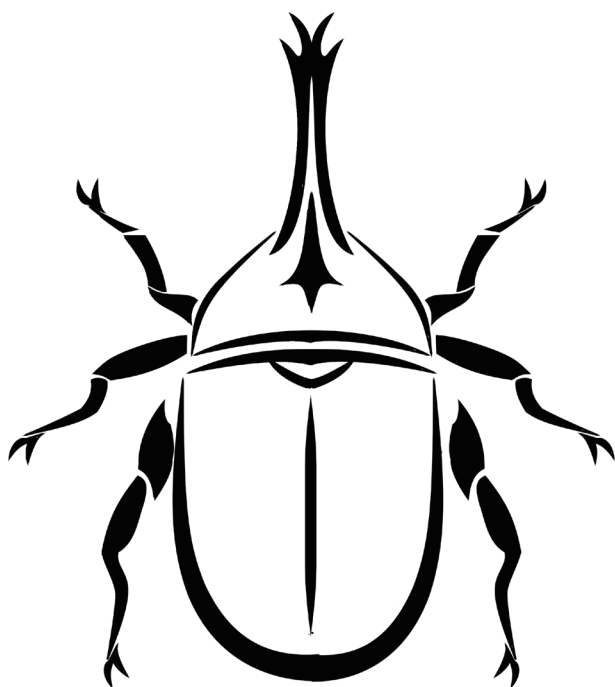
この細道は何という名前の道なんだろうか。細道にも色々ある。
奥の細道なら、松尾芭蕉が俳句を詠んでいるだろうし、天神様の
細道ならば、行きは良くて帰りが怖いんだろう。

じゃあ、芭蕉も天神様もない、この細道は——不酔の細道か。

大通りの方からは楽しそうな声が聞こえる。でも、俺は不酔の
細道を歩いていきたいと思った。華やかでもなく、道幅も大きく
ないけれど、道は果てしなく続いている。途中で人に会うことも
あるだろう。俺と同じく、酔えなくて、やつれている人に。

そんな人に会ったらどうしよう。そうだ、一緒に星を眺めよう。
この辺りは暗いから星がよく見えるんだ。彼らの紡ぐ歌や物語を
聞きながら、とりとめのない話をするのって素敵だと思わないか
い？（了）

福原大輝
二人、夜行



見渡す限りの荒野と夜空が青く広がっている。目の前には線路がずっと続いていて、そのレールの鋼鉄は真鍮色に淡く光って僕達の進む道を照らしていた。

太陽はとくに過ぎ去って、空には帯状に星々が見えた。目前の線路と画が重なって、その星々の帯に沿って走る鉄道が頭の中に浮かんた。けれども夜は深く、最終列車もすでに通っていった後なのだろう。汽車の音が聞こえることはなく、線路がきしむ音さえも聞こえない。何の音もしない荒野が果てしなく広がっていた。その日の月は暗かったが、その分星たちが青く光って、それは藍色の海の中に輝く夜光虫のようだった。

「こんな景色、あの時にもあったよね」

突然、君は僕を試すように訊いた。君と僕はほとんど同じ背だけれど、強いて言えば、君は僕よりほんの少しだけ小さいと思う。

歩く歩幅はそれほど変わらない。淡々と疲れることもなく、線路に沿って僕達は歩いていった。

「覚えていないな。夏のキャンプのとき？」

僕はそう言ったが、君はその言葉を聞いていないかのように空を見上げ、話を続けた。だから僕の言ったことは間違いだったかと不安になる。

「川が流れていて、その近くに蛍が飛んでいたね。まさに星みたいだったよ」

君にはその情景が浮かんでいるようだが、僕にはさっぱり分かんなかった。

「夜光虫のように？」

「蛍と夜光虫は別だよ」

君はくすつと笑って、その音が辺りに響いて消えた。

「そうなんだ」

やっぱりキャンプの話だ、そう思っただけだけど、僕の記憶は不鮮明でそれ以上に何も言葉が出てこない。

「その川はどこなのか」

ようやく絞り出した言葉に、君は絶句した様子で一回立ち止まった。

「君は何も覚えていないんだね」

君はその台詞の割に、僕をさげすむ様子はなかった。哀れんでいるようでもなく、もう既に別の事を考えているのかもしれない。

「そこまで虫は好きじゃないんだ」と僕は何に対してか誤魔化すように言った。

ははは、と君は笑った。「知ってるよ」

「もうちょっと聞かせてよ。思い出せるかもしれないから」

僕はお願ひするけど、君はかぶりを振った。

「いや、君には必要ないよ。興味ないだろうし」

「興味あるよ。だって僕もいた話だろう？ どうしても思い出したい」

君は仕方ないというように、川の名前や色、そこで食べた料理や味の感想、蛍が住んでいた場所とか、そのときの情景を事細かに話したが、やっぱり僕の記憶は不鮮明なままだった。

僕は過去の事なんかちとも思い出せないんだ。

僕がしょんぼりしているのに気づいてか、その後、君は唐突に訊いてきた。

「この先何かしたいこととか、かなえたいことはある？」

「この先？将来？」

将来、と君は短く答えた。

「したいことはない」

僕は急な質問に驚いたが、即答できた。

でも、それから僕は首を捻った。君が僕を見つめてくるから、何か回答しないといけないらしい。

しばし答えを待ってくれた君にこんな素敵な答えをプレゼントしようと、僕はふざけた。

「世界中のみんなが幸せならいいな」

「本当に思ってる？」

そう君は訝しんで、僕は笑った。

僕は本当にそんなことを思っているのだろうか、自分の心を確認していると、君がまた唐突に口を開いた。

「君は今、絵の勉強をしているだろう？」

「何で知っているの？」

「知ってるよ」と君はまた同じように言った。

君はなぜ、僕が絵の勉強をしていることを知っているのだろう。誰にも言ってなかった秘密のことだったのに。

絵が好きなんだろう、と君は念押しに訊いてくるから渋々僕はうなずいた。

「絵はいいね。才能がないとできないよ」

「そうかな」

「いろんなことを表現して、人を感動させたり、何かメッセージを発信したりできる。もしかしたら人を幸せにすることができるとかもしれない」

そう君が言うから、僕は首を捻った。

「絵は人を幸せにはしないんじゃないかな」

「そんなの分からないだろう」

君はきっぱりと言って僕を見たが、その後自信をなくしたのか目を逸らした。

「そもそも、そんなに絵にはこだわっていないんだ。かといって本当にやりたいこととかはないんだけど」

僕が早口で一氣に言う間、君は寂しそうな顔をしていた。ただ僕はさらに言った。

「このままでいいと思ってる」

「このままで？」

「うん、このままでいいんだ。先の事を考えるのは嫌いなんだよ」

「どうして？」

「君だって嫌いだろう？」

そう訊くと君は首を振って、それからじっと見つめてきた。

「どういうこと？」

僕がまた訊くと、君は誤魔化すように空を見上げた。僕は誤魔化し合ってばかりな気がしてきた。お互いを誤魔化し合ったとしても、自分自身を騙す事などできないのに。

「先の事を考えるのは難しいじゃないか」

僕は負け惜しみのように言うと、君はうなずいた。

「うん、それは知ってる」

「だったら君も一緒に考えてほしいな」

「いや、それは出来ないんだ」

君の否定は思ったより早かった。なんで、と僕が訊くより前に

君は答えた。

「君の人生だからね」

当たり前のことなんだけれど、一気に君から遠ざけられたような気がして嫌だった。

君はこれまでの僕のことをよく知っていた。どんな場面であっても、鮮明に僕のことを表現できた。でも僕は何にも覚えていなかった。空っぽの記憶だった。

それでも君は、そんなに僕のことを知っているのに、この先のことはちっとも表現してくれない。僕達はいつかどこかで離れてしまつて、それからはずっと助けてくれないんだろう。君の態度を見ているとそう思ってしまう。

そんな事を考えて、長い夜を歩いた。線路は僕達のすぐ隣にずっと続いている。空と線路の淡い光で照らされた道を僕達は歩き続けた。そしてふいに君は言った。

「もうここからは一人で大丈夫かな？」

「うん、大丈夫」

なぜだか僕は何の抵抗もなくうなずいていた。君と別れることを少しもいとわなかった。

「線路を歩くだけだろう？」

僕がそれだけを確認すると、じゃあ、と言つて君は背を向けた。でもあと一つだけ、君に訊いてみたかったことがある。でもその答えはすでに知っているような気がしていた。それでも僕の口は無意識に開かれていた。

「なんでここまでついてきてくれたの？」

「当たり前じゃん。君は僕なんだから」

「どういうこと？」

そう訊きながらも僕はもう知っていた。

——君が、ほんの少しだけ昔の僕だつてことを。

最後にこれをあげるよ、と君は背負っていた鞆から何かを取り出した。

「駅に着くまで開けてはいけないよ」

君が渡したのは、B5サイズのノートだった。普段鞆に入れているものよりは小さいが、分厚くずしりと重かった。表紙は古びて赤茶けているのに、そのページは一度もめくられたことがないかのようで、ノートの骨格は新品のようだった。

僕は君の背中を見送つた後、一人で黙々と歩き始めた。真横には相変わらず線路が続いて、きつとこれからも共に歩いていくのだろう。

考えたくないと言つていたくせに、この先の事を考えていた。君がいなくなつて、やる事がなくなつたからだ。君の言いつけ通りノートを開くこともしなかった。

世界中の人々の幸せについて考えてみた。僕はそれについてそこまで真剣に考えていないと思つていたけど、本当は考えていないとも言切れないのかもしれない。そのこと自体は、この先の僕と関係あるのだろうか。絵の事についてもいろいろ考えたけど、結論は出なかった。頭の中は雑踏と化していた。

やっぱり難しいんだよ、と君に言いたかった。

こうして歩いていたら、やがて駅舎が見えた。夜はいまだに続いている。永遠に思えるほど続いた線路の脇にその駅舎はあった。駅は思ったより簡素で、改札はなく、駅員もいない。ただ古びた

小屋があつて、それが線路の隣にあるというだけで駅舎だと、僕は思った。

僕はおそろおそろその駅舎の中に入った。中は意外にも清潔で、誰もいないようだった。隅にある茶色の椅子に腰かけると、隣の壁には時刻表が貼つてあるのが見えた。でも、ここで僕が待つのは始発列車ではない。

ここで僕は、未来の自分を待っている。それが役目なんだと確信していた。

「君」が現れるその時まで、暇つぶしに「君」のこれからのことを考えておくことにする。そして、考えたことをもとに僕はさつき別れた昔の自分みたいになつて、「君」の将来について質問する。その質問に「君」は答えられなくてもいい。僕みたいに、別れた後にゆっくり考えたらいい。この先のことや、そしてこの線路がどこへつながっているかを。

僕は昔の自分からもらったB5のノートを開いた。開いた途端、青白い光が目の前でポツと光つて、その瞬間僕は全ての思い出を知つた。光が終わつて、ようやく見えたノートの文字はすでに知っているものだった。やっぱりキャンプのことだったじゃないか、とここにはいない君に言う。だが、ページをめくっていくとやがて白紙のページが出てきた。

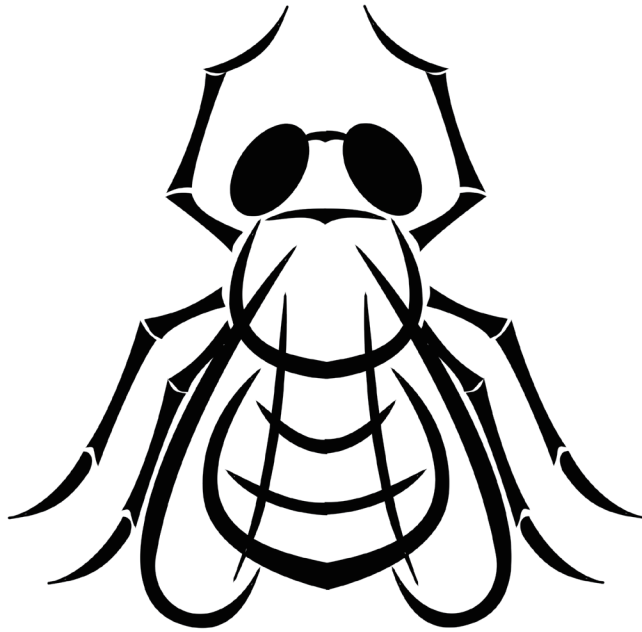
ここから先の物語は、きつと「君」にしか考えられない。この先のページは「君」が進むことで埋められる。

「君」が現れたその時、僕はもう「君」にとつての過去になつて、このノートに書いてあることを振り返つて思い出に浸ることしかできない。

駅舎の外には明けそうで明けない夜が続いて、僕は「君」を待っていた。

氷川省吾

ハエ



このところ、部屋にハエが入ってきて困っている。何かの拍子にふと壁や冷蔵庫の横などに目をやると、ポツンとハエが止まっているのを見つけたことが頻繁にある。部屋にはハエが入り込めるような隙間はなく、どこから入ってきているのかわからない。

ぶんぶん飛び回られるとうっとおしいことこの上ないし、食べ物や食器の上を歩かれると不潔なので、見つけ次第殺虫剤で殺しているが、気が付けばまたどこかにとまっている。

部屋に入ってくるハエはイエバエと呼ばれる類のハエで、調べたところでは動物のフンや生ごみに卵を産んで繁殖するタイプらしい。もしかすると部屋の中でウジが湧いているのかと思つて、ゴミをチェックしてゴミ箱もきれいにし、排水口も水回りもチェックして掃除したが、一向にハエがいなくなる気配がない。増えることこそないものの、殺しても殺しても出てくる。

となれば、あとは私が戸や窓を開けたときに入ってくる以外に考えられない。家を出たり入ったりするときに、洗濯物や布団を干したり取り込んだりするときに、ひっそりと忍び込んでくるのだろう。つまり、外にハエが繁殖しているような場所があるということだ。

ただ、外を見て周ってもゴミが捨てられているようなこともない。ゴミ捨て場も問題がなさそうだ。買い物に出ようとしていたお隣さんと会ったので聞いてみたが、ハエに困っているというようないことはないらしい。

やはり自分の部屋の問題なのかもしれないが、原因がわからない。飛び回られるだけでもうっとおしいのに、寝ている間に顔にとまられて飛び起きたこともあった。最悪なのは、開けっ放しに

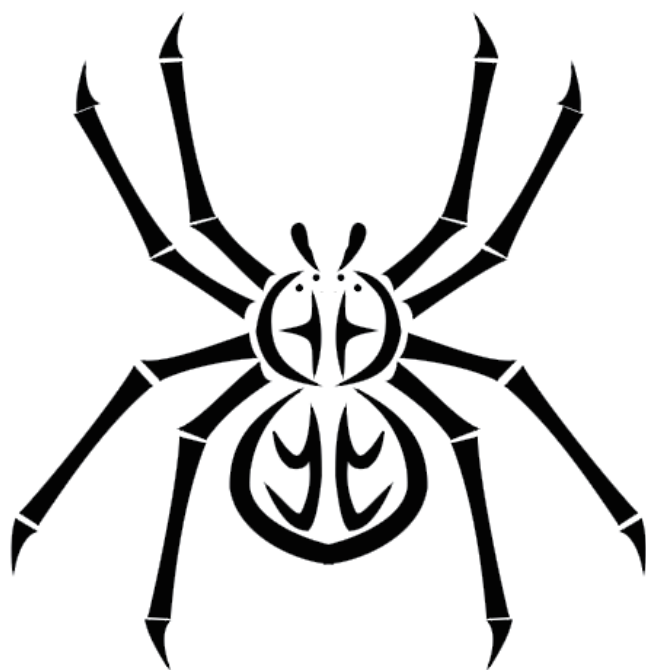
なっていた口の中に飛び込まれた時だ。嫌な感触がして飛び起きてみると、口の中で小さい物が暴れまわっている。ティッシュに吐き出して、黒いハエが唾液にまみれてもがいているのを見てしまうと、丸一日はウンザリした気持ちが続く。

さて何とかしないとながらも、いい案が思いつかないまま過ごしていた日の夜。これから寝ようと歯を磨いていた時に、口の中に異物感を覚えた。まさかと思つて吐き出すと、歯磨き粉の泡にまみれたハエが洗面所の中でもがいていた。

鏡に顔を近づけ、口を大きく開けて中を映してみる。一瞬だけ喉に何か当たるのを感じた直後、生きたハエが喉の奥から姿を現して、洗面所の照明めがけて飛んでいった。

マサユキ・マサオ

『朱と印』



目覚めると、私は大層立派な箱の中に居た。何故箱だと思ったのかというと、その部屋がほぼ立方体の形をしており窓が一つも無かったからだ。代わりにドアが一つと、充実した本棚、薄型テレビが備え付けられていた。壁にはゴッホだとかモネだとか、多分そういう類の絵画が掛けられていた。本棚はまるで私の趣味を誰かが覗いてきたかのように、私好みの小説やらスポーツ雑誌まで揃っていた。

ベッドから身を起すと、壁際のソファに一人の女が座っているのに気付いた。女はまるでスローモーションの様にしなやかな動作で背筋を伸ばし、私を見た。

「あら、起きたのね」

私は思わず、あつと声にならない声を出した。だらしく口を開け、唇だけパクパクさせながら彼女を見つめた。いまだかつて、これほどまでに美しい女性を見たことが無かった。真っ赤なチャイナドレスに身を包み、唇には服の色と同じくらい艶やかな紅が浮かんでいる。肌は白粉の様に白く、顎は可憐で小さい。瞳は黒く大きく、しつとりと濡れている。見つめられれば鳥も獣も恋に落ちるだろう。

大学を卒業してから三年、在学中に付き合っていた元彼女のことを思い出しては胸を痛めていた私だが、そんな芋臭い思い出は綺麗さっぱり吹き飛んでしまった。

「あなた黙っているけれど、何も覚えてないのかしら？」

女が小首を傾げて言った。

そう言われてみれば、私には思い当たることがあった。

私は新卒から三年間務めた会社を辞めて、再就職活動をしてい

た。少しばかり給料が良かった為に我慢して三年も働いてしまったが、毎日出勤する度にいびられ、同期の社員と比べられ嫌になった。

とにかく次は、あまり大変でない仕事に就こうと考えていた。資格を取るのも億劫だった。何の取り柄も無い私を、ありのまま受け入れてくれる会社が良いだろう、と思った。

そんな時に、ネットで見つけたのが『印』という求人だった。

『資格・経験不問。印になれる人材を探しています』

私は子供の頃から変なものに興味を持つ性分だった。これはまさしく変な求人に違いない。私は早速事務所に出向いた。待合室で待たされているうち、私はうたた寝してしまったのだ。その後のことは全く覚えていない。

目の前の女が首を傾げた格好のまま私を見ている。私はやっと口を開き尋ねた。

「すみません、あなたが面接官の方でしょうか」

よく分からない、といった表情を浮かべて女が答えた。

「私は朱よ」

朱肉の朱。彼女は確かにそう言った。

「あなたは印になりたくてここに来たのよね？」

「一応そうなのですが、まだなると決めたわけでは……」

にわかに不安が過り、私は言葉を濁した。

朱という女は少し俯き、考えた様子で言葉を継いだ。

「じゃあ、改めて聞いわ。あなた印になる気はあるのかしら？」

「印になるとどうなりますか？」

「あなたの元に認めて欲しい人たちがやってくるようになります」

す。彼らを認めてあげるのがあなたの仕事よ」

なんだそれは、と思ったが先の話を聞くことにした。元々私は、変な仕事を探しにやってきたのだ。それに、仕事内容はとても楽しい気がした。

「それだけでですか？」

「あとは、あなた私と暮らすことになるけれど、良いかしら？」

朱が顔を寄せてきた。私はちよとした眩暈と動悸を感じ力が抜けそうになった。とにかく冷静にならねば、と自分に言い聞かせ、大きく息を吸い込んだ。

「やりましょう」

「分かったわ。今日からあなたは印よ」

朱が私に抱きついてきた。これはまるで夢の様だと私は思った。内容はよく分からないが、仕事と女が同時に手に入ったのだ。私は朱の肩にかかるドレスの紐を慎重に下ろした。私は言葉通り、ベッドの上で朱と交わった。シャツがよじれ、身体の隅々まで朱肉と密着した。これは私の運命なのだろう、と思った。私は川に遡上する鮭のことを想った。鮭が命を賭して遡上するように、私も印であることに身を捧げるのだ。そうして私は、身も心も真っ赤に染められていった。

朱と暮らし始めて、一週間が経った。用がない限り外出は出来ないとのことだった。用を足す時と入浴時は一度扉を開けて外に出るが、その先は二重扉になっていて、外からは鍵がかけられている。しかし、私はその生活にストレスを感じることは少なかった。

た。通販では好きな物を買えたし、その気になれば出前をとることも出来た。何より箱部屋には朱が居たし、退屈することはなかった。

そうして日々を過ごすうち、私の前に度々認めて欲しい人々がやってきた。事前に連絡は無く、不意打ちのようにチャイムが鳴り、彼らはやってくる。犬を飼ってもいいか、フィリピン人の女と結婚してもいいか、仕事を辞めてもいいか、海岸でバーベキューをしてもいいか。そんな細々としたことを、いちいち私に話にくるのだった。

「職場が嫌すぎて、上司の顔も見たくありません。着信拒否にして逃げてもいいでしょうか？」

「大丈夫です。認めます」

「旦那に内緒で出会い系サイトを始めてもいいでしょうか？」

「認めます」

「元彼女にあげるはずだったアクセサリを、今の彼女への誕生日プレゼントにしてもいいですか？」

「認めます」

一人で幾つも要件を抱えてきている場合もあり、聞かされる内容はほとんど聞き流していた。聞き終えらると、朱が内容を紙に書き写し、私がそれに署名を入れた。すべて手書きのいい加減な書類だったが、それを渡すと依頼人は満足して帰っていくのだった。

そんなある日のこと、一人の男が部屋を訪ねてきた。彼の顔を見た瞬間、私は思わずあどろりとした。身長が低く小太りで、そ

のくせ自信に満ちたいやらしい目をしたその男は、私が以前勤めていた会社の上司だった。

「出来れば十五分以内に認めてくれ」

元上司は、座って良いとも言われていないのに椅子に腰かけ、腕時計を気にする素振りを見せた。そこは普段、朱が腰かけている椅子だった。朱が気にする素振りを見せないことが、逆に腹立たしかった。

不思議と、元上司は私が以前の部下であることを覚えてない様だった。他人として接してみても、改めてこの男の醜悪さに気付く。ぎょろりとした目玉、酒とタバコでどす黒くなった肌、不遜でタラコのような唇。まるでガマガエルの様だ。極めつけは朱に対する不躰な視線だ。先程案内された時、さりげなく朱の腰を触っていた。

元上司は、新しく入った社員が使い物にならない、使用期間で首にしたいから認めてくれ、と言ってきた。朱がその内容をサラサラと紙に書き写していった。元上司は、その短い間さえ我慢できないのか、ひじ掛けをトントンと叩き貧乏揺すりを始めた。その様子は、私が会社に居た頃とまるで変わっていなかった。私が書類のコピーを頼まれた時も、離れた席からこちらを眺め、机を指でトントンと叩いて私を急かしていた。

朱が書き終わると私の前に書類を置いた。私はしばらくそれを見つめたが、ペンをとらなかった。

痺れを切らした元上司は、恫喝する様に私を睨んだ。

「なあ君、午後から役員会議があるんだ。早くしてくれないか」
私は目の前の男と、思い出したくもない記憶とを重ねて、口の

中がカラカラに乾いていくのを感じた。そしてつれた舌をかぼそく震わせて一言こう呟いた。

「認めません」

「はあ？ 今何と言ったんだ」

「認めない、と言ったんです」

元上司は口を半開きにして真っ青になり、わなわたと震え出した。

私は自分がとんでもないことをしてしまった様な恐怖を感じた。しかし、今更引き下がることも出来ない。そして勢いのまま、欄一杯に『認めません』と記入した。

「お、お前、こんなことが許されると思っているのか！」

元上司は立ち上がって私を指さしながら罵った。その横で朱が無表情でその内容を書きとった。

「私は、あなたを認めません！」

私は元上司の名前を書き、私はお前の存在を認めない、と書き殴ってやった。彼は私のことを指さし、認めない認めない、と呟きながら部屋を出て行った。机の上には、渡すはずだった用紙だけが残された。

私は胸がスツとした気持ちになった。思えば奴には、今まで散々職場で否定されてきたものだ。これでこそ印になったかいもあったと言えよう。

「この紙、持っていつてくれなかったね」

朱に尋ねる。朱は、少し考えこんで首を傾げた。

「郵送で送ることが出来れば良いのだけれど」
きつと、朱もこんなことは初めてなのだ。朱に先程の出来事を

咎められるのでは、と内心不安だった私はその様子を見てほっとした。

「さっきの男の会社なら知っていますよ。そこに送れば良いんじゃないかな」

「ええ、もしそう出来るのでしたら」

朱は封筒を用意し、私の言った住所をそこに書き込んだ。

「では、行きましょうか」

「ええっと、どこにですか？」

「扉の外へ」

朱にそう言われて初めて、しばらく外に出ていないことに気付く。一体、今日は何月何日なのか、昼なのか夜なのか。窓一つ無いこの部屋からは外の天気や時刻すら分からない。実際、ここは隔絶された別世界なのかもしれない。最初に感じたように、この部屋は朱と印を閉じ込めた箱だった。

朱は、まず内の扉を開けて三步進み、奥の扉のノブを回した。扉はあっさりと開いた。何となく閉じ込められているような気がしていたが、私はいつでも外に出られたということか。

二重扉の外には薄暗い登り階段があった。階段を昇るとそこは、市役所の真ん前だった。私が面接に来たのは市役所からだいぶ離れた駅前のビルだったはずだ。いつの間に私はここまで運ばれたのか。

時計塔の時刻を見ると、丁度正午を回ったところだった。ポストはどこだったかしら、と言いながら朱がうろうろと歩き出す。私もその後に付いていく。市役所周りを歩く深紅の朱は場違い甚だしく、道行く人が男女問わず朱に視線を投げかける。私はなる

べく朱にびったりと寄り添って歩いた。

役所の正門前を横切った時、私はとんでもない光景に出くわした。そこには人だかりが出来ており、その中心にはブリーフ一丁の男が磔にされていた。その男は、紛れもなく私の元上司だった。私が遠巻きに彼を見ると、彼もまた私を見て気味悪く笑った。

「やあ、君かい。君のおかげで私は人間失格になってしまったよ」よく見ると、元上司を括り付けた柱にも人間失格と印字されていた。早く立ち去らねばと思うのに、私は彼から視線を外すことが出来なかった。

「よく聞けよ、印の人。今日、お前の代わりがやってくるらしい。留学先から、実印様が帰ってくるぞ。優秀な実印が、お前にとつて代わるんだぞ！」

元上司は私に向かって呪いの様に叫び続けた。実印が、実印がやってくるぞ。発狂したようにケタケタと笑う元上司に、群衆の一人が石を投げつけた。この狂人っ、バワハラじじいっ、などと叫んでいるのは、よく見たら私の元同僚だった。彼もまた私の存在に全く気付かない。

果然と立ち尽くしていた私は、朱に手を引かれ我に返った。

「行きましょう」

朱は一人でポストに封筒を投函し終えてきたようだった。さっきの男がどうなるのかと私は尋ねた。朱は首を傾げて言った。

「あれは認められない人間ですからね。今後どうなるかは、私にもさっぱり」

それはもう取り返しが付かないことなのか。さっき投函した封筒を何とか差し止め出来たら、やり直しは出来ないのか。喉元ま

でそんな言葉が浮かんだが、私は押し留めた。私は、自分の意志でそれを選んでしまったのだ。

久しぶりに外の世界を歩いた私は、それだけでなんだか疲れてしまった。辺りを見渡すと、外の世界は一面夏だった。蟬がじりじりと鳴き、直射日光がアスファルトを焼いていた。早く、あの静寂に満ちた箱部屋に戻りたかった。早く帰ろう、と朱に言おうとしたその時、一台のリムジンが役所の玄関前に停まった。

「実印が帰ってきたわ」

朱がリムジンに駆け寄った。その助手席から出てきたのは、水も滴りそうな爽やかな長身の男だった。真っ白なワイシャツとスーツに身を包み、百九十cmはありそうだ。体軀はラガーマンの様に屈強そうでマーベルの映画に出てくるスーパーマンの様だった。私よりも年下だろうが、立ち姿の風格と威厳は私の一万倍はあろう。彼のキリつとした眉がこちらを向き、私は思わずすくんでしまった。

「あなた、いつ帰ってきたの」

朱が親しげな表情を浮かべて、男にすり寄った。私に対して、あんな表情をしたことは決してなかったのに。私は思わず歯ぎしりをした。

「つい二時間前、空港に着いたところさ。すぐにでも君に会いに行こうとしていたところだよ」

男は爽やかな笑顔で朱に微笑んだ。そして、朱に振りまいた爽やかかすを私にもまき散らしてきた。

「やあ、君が印の代行をしてくれたのかい。それは大層、すまなかったね。名前は、ええっと」

男は朱にちらつと視線を送った。朱は頭を振って、忘れちゃったわと恥ずかしそうに言った。

「そうだ、君に渡したい物があるんだ」

男は朱に白い小箱を差し出し、そっと開いた。見なくても分かるが、中身を覗いてしまう。それはダイヤの指輪だった。

「俺と結婚してくれ」

朱がそれを受け取る。そして、こくりと頷いた。私には何も言えるはずもなかった。いや、少しくらい口を挟む権利はあるはずなのだ。しかし、それは考えられる限り最も惨めな状況だった。彼は実印であり、私はその代行だったのだ。実印の代用ということとは認印ということか。そもそも認印の存在意義なんてあるのだろうか。認印って、朱肉が無くても押せるんじゃないだろうか。

そんな思考がグルグルと頭を駆け巡る。朱と男が談笑をしているが、何を話しているのかさっぱり理解出来ない。不意に男がポンポンと私の方を叩いてきた。

「今、朱と話していたんだが、君にも出来ることはあるんじゃないかってね。だいぶ仕事は少なくなってしまうだろうが、三人で仲良くやっていこうじゃないか。アハハハ」

私は肩に置かれた男の手を振り切って、一目散に走りだした。どこでも良いから遠くへ行きたかった。照り付ける太陽の下、私は駆けた。息が切れ、口の中がカラカラになっても走り続けた。走っていると何故かブリーフ一丁の元上司が後から私に追いかけてきた。一体どうやってあの状況から逃げてきたのだろうか。

「ふははは、実印が来たぞお」

ああ、分かってるとも。私は負けてしまったのだ。この元上司と同じく。元上司も流石に叫ぶのに疲れたのか、息継ぎの呼吸音だけが響くようになった。数分間、無言で併走を続けた後、我に返ったように元上司が言った。

「お前、うちの会社に居たよな？」

「ええ、居ましたよ」

「思い出したわ。本当に、今まで見たことないくらい鈍くさかったもんなあ」

素っ裸の元上司が、ゲヘゲへと笑う。それは私にとって、もう恐れるべき相手ではなかった。私の最後の仕事、彼を否定する封筒が今まさに配達されているのだ。

「何度でも言おう。私はお前を認めない！」

私にまだ印の力が残っていたせいなのか、元上司は語気に押されたように躓き転んだ。打ち所が悪かったのか、膝を抱えてギャアアつと悲鳴を上げた。

私は振り返らず走り続けた。気付くと周囲は夜になっていた。誰も居ない夜道を一人ひた走った。走っているうち、不意に朱のことが頭によぎった。愛ではなく、恋ですらない関係だったかもしれないが、切ない気分に襲われ少し泣いた。一つ言えるのは、あれは人として男女として間違った関係だったということだ。間違っていたのはきつと、朱と私のことだけではないのだろう。印だった私、そして唐突に表れた実印、印の存在自体が間違いないのだ。

もし私に、力が微かにでも残されているのだとしたら、印をこの世から消し去ることに尽力しよう。そう考えたら、なんだか力

が湧いてくる気がした。私は印を失くす為に印になったのだ。どうすれば印を失くせるのか分からなかったが、ひとまずは走っていたかった。印を失くす方法は、ひとまずそれから考えれば良い。知らない街まで走り抜けよう。夜が明けて力尽きるまで走って、それからどこか休める場所でひと眠りして、それから。



監修：

マサユキ・マサオ

編集：氷川省吾